題　名　屠所の羊　下　赤い花
作　者　ドーナツ
発行日　2015年1月24日発行
連絡先　twitter：@donut_no_ana
tumblr：http://donut-st.tumblr.com/
※ horirium 様（@horirium）の考案された折本デザイン、楠樹暖様（@kusunokidan）の作成図を使用しています。

屠所の羊　下
赤い花

ヨシュアは頭の横で指を回し、尻を叩いて見せた。だが、獣は言葉にもゼスチャーにも反応しない。おそらく定例に沿った行動しか許されていないのだろう。

「バカ犬！」

軽侮という行為を理解しているかどうかさえ怪しかった。

「ぼくを見ろ！　よくもこんな目に遭わせたな！」

獣は、ただヨシュアの動きを目で追っている。ヨシュアは足元の石を拾い、獣に投げた。斜め前方に回避した獣は唸り声をあげる。瞬間、獣の体は横ざまに弾き飛ばされた。強い体毛に覆われた巨大な腕が現れる。鋭い爪から血が滴っていた。小山のような体を後ろ足二本で支え、耳をつんざく咆哮を放つ。目は一点、ヨシュアを見つめていた。

「……怪物？」

ヨシュアは動くこともできず、力の権化と対峙する。その間にも獣が、背中から腹にかけて傷を負いながら立ち上がろうとしていた。しかし、裂けた皮膚から肉が覗き、血液が絶えず流れている。果たせず、頭だけをもたげた。遠吠えを始める。

突進してくる怪物に黒いものがぶつかっては弾かれていた。『犬』たちである。さきほどの遠吠えは、獣が仲間を

招集するための行動だったのだ。

怪物は、獣よりもさらに大きい。個体としての力の差は歴然だ。資質の違いについては百も承知なのだろう。『犬』たちが行っているのは集団をもった持久戦である。常に攻撃し、動作が鈍り始められては、急所を狙った攻撃が可能となる。

かもだ。

再び咆哮をあげ、怪物は爪を突き出す。

『森には、恐ろしい怪物がいるんだ。ぼくたちを食べちゃうよ』

怪物の目的は明らかだ。ヨシュアを捕獲したいのである。ヨシュアが、この場を去れば、戦闘は沈静化するはずだった。だが、ヨシュアは、この事情にまったく斟酌しない。彼は『犬』たちが怪物に手いっぱいなのを見計らい、村の境界線を踏み越えた。

つい昨日の光で獣と怪物が争い、血を流している。不運な一匹は地に伏し、腹の裂けた獣の内臓が冷え冷えと空気の中で湯気を立てていた。

ヨシュアは、驟雨をよぎり花を続けざまに花崗岩に近づく。

中に持ち込まないでください」

「うん。迷惑かけてごめん」

ヨシュアは、脱いだ衣服をエリに渡した。簡は、ヨシュアの背丈ほどの高さに せり上がっている。カレブの隣にヨシュアがエリ立つと回時に観客からどっと笑いが起きた。

「さぁ、ヨシュア！　手を振る。大地に足を接した簡の中で ヨシュアとカレブの姿は崩れ、白い細かな塵となった。輝きなが ら天へと昇っていく。

（おわり）

ヨシュアとエリ以外の九名の反応は、有体に言って戸惑いである。彼らにとって死は、一定期間が過ぎた後に訪れる決定事項だ。突発的な仲間の早逝を訝り、恐怖に身を震わせている。

エリが筒の表面に掌を置いた。すぐさま十六桁の数字が表示される。

「神様。あなたの知恵と偉大さをお示しください」

光の文字が浮かび上がった。日付、数字と記号の羅列に並び、『同様の処理となる』と指示がある。

エリは、本をめくっていた。

「はい。……みんな。カレブを『塔』の中へ！」

エリの言葉にヨシュアを含めた三名がカレブを運ぶ。続いて別の日付、番号が打ち出された。

「ヨシュア以外は、外へ」

本を繰っていたエリが再び、命じる。

「どうしてヨシュアも？」

「ヨシュアは、村の境を越えたんだ」

疑問の声にエリが答えた。息をのむ気配、押し殺した嘔きが辺りを満たす。

「悪いけど、服を脱いでもらえる。カナンの物は『塔』の

ヨシュアの手に目を留めたエリの顔は、昨日とは別の驚きに彩られる。

「……ヨシュア。きみは、境を越えたの？　どうして？」

「十四年でも大変そうだ。百五十年は、無理だよ。ぼくにはね」

口を開きかけるエリの背後で『犬』たちが遠吠えをはじめた。声は次第に大きくなり、空を幾条にも分断する。

「報告している。……『塔』へ行かないと」

エリはヨシュアに肩を貸し、抱き起した。

「塔？」

「そう。カレブが死んだんだ。屋根の梁から落ちて。みんなも集まってるから」

一人の少年が広場の隅のそびえている。ヨシュアは花を足元へ放り投げた。

カレブは草の上に全裸で横たえられていた。首を折ったらしく少年、不信感だが、顔は安らかに見える。

「あの音。何だったの？」

『塔』の周囲に集まっていた一人が口に尋ねた。

「後でいいかな？　カレブのことがあるから」

落雷である。

一連の出来事に恐れをなしたのだろうか。怪物は『犬』たちをあらり払い、森の奥へと逃げ去った。ヨシュアを一顧だにせず。『犬』たちは仲間の死体を一か所に集めるとである。轟音が大気を震わせた。

「……死んじゃった？」

ヨシュアは掌で潰れている花を眺めた。花弁の赤が皮膚を染めている。

「ヨシュアー」

かけ寄ってきたのはエリだった。

「何があったの？　すごい音だったけど」

獣が方向を違え、前後しながら走っている。遠目では牧歌的な談のようでもあった。

雷鳴のただ中にヨシュアの掌が疾く。手、足、肩の苦痛に苛まれながら天を睨んだ。光の柱がヨシュアに向かってくる。ヨシュアの躍躍を妨機と見たのだろう。獣はヨシュアへ体当たりした。ヨシュアは、境界の内側へと弾き飛ばされていた。『犬』たちは仲間の死体を一か所に集めるとである。轟音が大気を震わせた。

光の中でなすすべのない獣の体は、やがて地面に硬直する。

ヨシュアは、かけ出した。目指したのは、村の境である。獣は境界侵犯に対する定例に従い、行動するはずだからだ。しかし、痛む足では、まともに走れない。ヨシュアにとって幸いだったのは、獣の負傷が深刻だったことだ。獣の命は、地面を叩く体液とともに失われようとしている。

追いかけっこの始まりだ。

雷鳴が、だんだん大きくなる。空は以前、快晴であったが、木々に阻まれ、かげって見えた。その下をヨシュアとのために体勢が崩れ、獣はよろける。

ヨシュアは、かけ出した。目指したのは、村の境である。獣は境界侵犯に対する定例に従い、行動するはずだからだ。しかし、痛む足では、まともに走れない。ヨシュアにとって幸いだったのは、獣の負傷が深刻だったことだ。獣の命は、地面を叩く体液とともに失われようとしている。

追いかけっこの始まりだ。

雷鳴が、だんだん大きくなる。空は以前、快晴であったが、木々に阻まれ、かげって見えた。その下をヨシュアと

く。散策といった足どりだ。花も、この地獄絵図にわれ関せず、甘い香りを放っている。ヨシュアは枝を折った。遠くに見えていた花が今は自分の手にある。それを眺めるヨシュアの顔に笑みが浮かんだ。

ふいの遠雷に驚き、ヨシュアは天を見上げる。しかし、空は青いまま晴れわたっていた。首を傾げるヨシュアの耳に唸り声が響いてくる。

振り向いた先に片目の潰れた獣が佇んでいた。四本の足で身を支え、荒い息を吐いている。ヨシュアに向かい、前傾姿勢をとった途端、獣の腹から血液がふき出した。苦痛